慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	関係の変容と個人 : 分化と恋愛をめぐって
Sub Title	
Author	草柳, 千早(Kusayanagi, Chihaya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1999
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.4 (1999.) ,p.17- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集I: 自由と秩序 : 主体としての個人の行方
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19990000-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

関係の変容と個人

分化と恋愛をめぐって

草柳　千早

1．はじめに

社会学は、社会とそこで成員が取り結ぶ諸関係のあり方とが相互に規定しあうさまを観察してきた。19～20世紀の転換期に著されたジンメルの『社会分化論』（1890）は、社会の拡大と分化によって個人間の相互作用がいかに変容しまたそれによって個人にいかなる影響が与えられるかを考察した。同時期相次いで出されたデュルケムの『社会分業論』（1893）やテンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（1887）も同様に、当時の社会変化のなかで、伝統的な関係に対して質を異にする新しい関係性の生成、成員間関係の質的変容を同時代において明記するものであったと言えよう。ジンメルは、社会分化による個人の属する多様な圏の数は、文化の測定器のひとつであると述べたが（Simmel 1890: 訳112）、現代の私たちは各々数多くの圏に属しており、情報化がこれにさらに拍車をかけている。現代社会はジンメルの時代以上に著しく分化の進行した社会である。個人はますますさまざまな顔を持つ多元的な自己として振る舞い、こうしたなかで個人が他者と取り結ぶ関係も変化する。本稿は、このことを「恋愛」において考察する。

現代日本社会において、人びとを結びつける関係形式としての恋愛はどのようなものか。「恋愛」は、しばしば観念的に抽象化され、恋愛主体の性別と無関連に論じられるが、ここでは、女性にとっての恋愛に限定し、そのあり方と変容を考察する[1)]。以下では、若い女性向けのコミック、小説における恋愛の描かれ方を手がかりに、ひとつの仮説を提示してみたい。実際の恋愛経験に直接照準するのではなく、作品に着目するのは、コミックや小説にはその時代のリアリティがある種凝縮された形で反映されていると考えるからである。逆に、仮に人びとの経験に照準するとしても、それは過去あるいは現在の経験についてのある時点での反省に解釈を与えるというものであり、ここでの目的からして、作品に着目するよりも決してより直接的であるとはいえない。

以下、2節ではまず、「恋愛」のひとつの典型的な捉えられ方を確認する。そして、そのような「恋愛」のあり方を、70年代に書かれた少女向け作品に確認するとともに、その特徴を作品の検討を通してより詳しく見る。3節では、以上のような「恋愛」に対して、現代の恋愛はどのような方向に隔たろうとしているのかを、90年代の作品を手がかりに考える[2)]。最後に、

関係形式としての恋愛の変容の含意を論じる。

2．「強い恋愛」

(1)「全自我をあたえる」形式

次のジンメルの記述は、「恋愛」の関係形式としての性質を明快に論じている。

「…たいていの人間にあっては性的な愛情は、議論の余地なく全人格の門戸をもっとも広く開け、さらに少なからぬ人間のばあい恋愛は、彼らが全自我をあたえることのできる唯一の形式であり、それはときどきの芸術の形式が芸術家に、彼の内的なもののすべてを提示できる唯一の可能性を提供するのと同じである」。

「このことは女性においてとくにしばしば観察されるであろう。…（中略）…すなわち女性は、たんに彼女らが愛するからというのみで、彼女らのその他の存在と所有とをあますところなく捧げるのではない。むしろ存在と所有とがいわば愛情において化学的に溶解され、そしてたんにまったく愛情の色彩と形態と調律とにおいて他者の上に溢れるのである」（Simmel 1908: 訳366）（強調筆者）。

ここでは「恋愛」は、人が「全自我をあたえることのできる唯一の形式」という特別な関係形式であること、しかも女性において特にそうであることが述べられている。

日本の社会学者に目を向けよう。以下が書かれたのは1960年代後半、恋愛結婚イデオロギーの下「恋愛結婚」が多数派となり、恋愛が相次いで論じられた時期である。

「それでは、恋愛に神聖な価値が付与されるのはなぜか。それは人が恋愛に全体的なコミットメントを行なうからである。…（中略）…恋愛は相互的であることを理想とし、『人を盲目にし、人を癡愚にし、人を燥狂にし、人を迷乱』させる。粋が自己抑制の道であるのに対し、恋愛は全体的自己の表現をめざす」（作田1968(1973): 104-105）（強調筆者）。

「…ブルジョア社会の『秩序の要請』に応えて登場するのが、いわゆる『恋愛結婚』、つまり恋愛を結婚に直結し、恋愛（およびそれにともなう性活動）の反秩序のエネルギーを、結婚（ひいては家族）という社会制度のなかに組みこんでしまうことによって中和するというコントロール様式である」（井上1969(1973): 160）（強調筆者）。

作田の言う「全体的なコミットメント」「全体的自己の表現」とは、ジンメルの言う「全自我をあたえる」形式とほぼ同じことであろう。作田はさらに、恋愛は、「その参加者を一つのゲマインシャフトの成員とし、彼らを外界の圧力から精神的に防衛し」、「単独の個人では経験しにくい自信」を彼等に付与するとして（作田 1968(1973): 109-110）、透谷を引きながら、恋愛の「牙城」としての性格を論じた。

恋愛のこうした性格の意味は、「外界の圧力」を「社会規範」と言い換えるならより鮮明になる。井上が強調しているのはこの点である。井上は、恋愛を、結婚と本来相反する「反秩序のエネルギー」であるという。彼のいう恋愛の反秩序性とは、もろもろの社会規範に対して「盲目」となることである（井上 1966(1973): 191）。確かにその極端な事例として、恋愛によって、人が家族や階級の秩序から甚だしく逸脱し事件にまで至ることは、明治以来頻繁に見い出されてきた。

こうした関係は、結婚をはじめとする秩序に反する可能性があり、反するときには、それに鋭く対立するものとなろう。しかし逆に結婚に直結させるならば、まさにこの同じ性質ゆえに、結婚を価値づけ夫婦関係を基礎づけるものとなろう。恋愛結婚イデオロギーとは、こうした恋愛の効果を制度へと巧みに回収するものであった、というのが井上の議論であった。

つまり、ここで論じられているような恋愛は、個人を他の個人に強く排他的に、「全自我」「全体的コミットメント」を以って、「互いに相手を独占しようとする」（作田1968(1973): 123）形で、結合させるような関係形式である。それは、個人を他の社会諸関係から切り離し、この私的関係の「牙城」に籠らせ、単独の個人であれば屈せざるをえない「外界の圧力」にも立ち向かわせうるのである。こうして特徴づけられるような恋愛を、ここでは「強い恋愛」と呼ぶことにする。

（2）分化と恋愛

では、「強い恋愛」における全人格的コミットメントとはいかなる事態であろうか。ジンメルは、先のように恋愛に言及したとき、友情について次のように述べていた。

> 「友人関係は献身のこの（恋愛の）激烈さを欠くが、しかしまた献身のこの頻繁な不均斉をも欠き、それはむしろ全人格を全人格と結びつけ、むしろ心の封鎖性をなるほどそれほど激しくはないにせよ、しかしより広い範囲とより長い継起において解消する。しかしそのような完全な親密さは、人間の分化が増大するにつれてますます困難になるであろう。おそらく現代人はあまりに多くのものを隠さなければならないため、古代の意味における友情を保つことができず、おそらくは人格もまたきわめて若い年頃を除けば、あまりにも独特に個性化し、完全に相互的な理解とたんなる受容とを可能にすることができない。…（中略）…それゆえ現代的な感情様式は分化した友人関係へ、つまりはその領域を人格のそれぞれの一側面のみにもつ友人関係へとますます傾き、他の側面はそこへは入りこまないように思われる」（Simmel 1908: 366-367）（強調筆者）。

ここで指摘されているのは、社会分化が全人格的関係を次第に困難にしていく、ということである。全体性とは、分化に背反する事態なのである。私たちは多様な圏に属し、このとき私たちの人格は「無数の社会的な糸の交差点にすぎず」、また「ひとつの圏への参加が自然に他

の圏への参加を指定することが少なければ少ないほど、人間は両者の交点に立つことによってますます決定的に特徴づけられる」（Simmel 1890: 112-114）、つまり互いに対して特殊化する。言い換えれば、「秘密」が増大するのである。

「秘密」の増大と「分化」は、同じ事態の別表現である。

> 「…決定的なことは、秘密が第一級の個人主義化の契機であり、しかも典型的な二重の意味においてそうであるということである。すなわち第一に、強い個人的な分化状況の社会的な状態は、高い程度において秘密を許し、さらにそれを要求するということであり、第二に、逆に秘密はそのような分化状況を支え、さらにそれを高めるということである」（Simmel 1908: 375）。

閉じた小さな圏での秘密の形成と保持は困難だが、圏が拡大すればその反対になる、とジンメルは言う。現代、秘密の増大は不可避であろう。端的に情報化は個人の圏をかつてなかった形で飛躍的に拡大し、秘密を増大させる。人は相互に秘密を抱えた人格、言い換えればその全体性が不可視の人格として相対することになる[3]。

現代社会は分化の進んだ社会であり、そこでは、個人はさまざまな社会関係の「交差点」であり、それぞれの関係に現れる自己は、全体というよりも分化した断片である。「自分探し」という言葉があるように、自己の全体性は、個々の断片においては恐らく実感されにくく、自身にとってさえ不可視である。

ならば、先に見たような、全人格的関係として論じられるような「強い恋愛」は、こうした分化状況を例外的に免れる、きわめて異例の関係ということになるだろう。だが、そのような関係は現代いかにありうるのか。しかしこう問う前に、このような「強い恋愛」が、かつてまさしく描かれ、女性たちに提示されていたことを確認しておこう。私たちはそのひとつの形を1970年代の少女向けコミックのなかに見い出すことができる。

(3) すべてを彼に～70年代のりんご

田渕由美子の「風色通りのまがりかど」は、1975年、少女マンガ誌『りぼん』に掲載された[4]。当時の『りぼん』は、「等身大の少女たちの他愛のない恋愛をやや現実離れしたトーンで描く」ことを特徴とする作家たちを擁し、その読者層を従来の小学生から中高校生、大学生にまで広げ、同時代の読者たちの広い支持を集めていたとされる（大塚 1991: 15, 20-21）。この作家たちの一連の作品は「乙女ちっくまんが」と呼ばれる。

この作品は、要約すれば、主人公「りんご」が、婚約者「周ちゃん」との婚約を、自分は彼に相応しくないのではないかという疑いから破棄しようとするが、彼にそのままでいてよいと肯定され、再び幸せな婚約者に戻る、というものである。

主な舞台は予備校とその周辺である。物語は予備校にりんごが駆けつけるところから始まる。

彼女は、そこに通う周太郎に毎日正午ちょうどに手作り弁当を届け、その後終業まで、むかいの「人気の少ない公園」で一人ベンチに座って待つことを日課としている。終業の鐘の音を聞くと、彼女は予備校の門まで走っていく。周の仲間には二人の男と才媛園子女史がいる。帰り道りんごは、彼らの知的な会話に入ることができず、自分がもう少し頭がよければよかった、「こんなふうじゃあ周ちゃんのオヨメさんになってもまともにやっていけないんじゃないかしら」と自信がない。翌日、周が風邪のため、りんごは代理で園子女史に専門書を届け、周の仲間たちに差し入れをする。彼女はいつもの習慣から公園で時間を過ごし、授業後、彼らが帰り道に話しているのを立ち聞きしてしまう。仲間の一人は、りんごを「周太郎ほどのオトコがいそいそと婚約するほど魅力にみちた女の子とはとても思えない」と評していた。彼女は帰宅するや周に婚約破棄の手紙を書き、彼の部屋に窓の隙間から投函する。それを読んですぐやってきた周に、彼女は、公園で知り合ったT大医学部の大学生を好きになったと嘘をつく。しかし翌日嘘はばれ、「婚約は解消しないね？」と言う彼に、りんごは泣き震えながら「わたしみたいにナンにもできない子でいいの？」「ゴ…ゴメンネ……」と応え、そんな彼女の小さな姿を周は優しいまなざしで包み込むように見守る。そしてまた弁当を届け公園で待つ、というりんごの日常が再開される。

この作品を現代読んで驚くのは、主人公りんごの個人的なプロフィールが一切欠落していることである。周とその仲間は難関T大学を目指す予備校生である。ではりんごは何をする者なのか。作品から分かるのは、周の婚約者で、彼に毎日弁当をつくって届けその帰りを一人で特に何もせずただ待っている、ということだけである。だがここに核心がある。彼女は、周の婚約者、恋人であるほかに、他の何者かである必要がなく、彼のため以外に何かをしている必要もないのである。周以外の他者（同性であれ異性であれ）との関係はほぼ皆無で（それで公園で見かけただけの男性を嘘の相手とするしかない）、描かれない。園子女史はそんな彼女に「ジェラシー」を感じ、女性の幸福は、頭がよくて男性と対等であることよりも、頭が悪くても（むしろそのかわいらしさゆえにこそ）男性に生涯の恋人として選ばれ愛されること、ということが示される。

ここに描かれているのは、唯一無二の異性との関係のうちに全存在が完結している女性の姿であり、女性にとっての「恋愛」のあり方である。周との関係はりんごのすべてである。りんごの全人格の座はそこにある。というよりも、物語の描かれ方に示されていたように、他の人格的側面が他の関係に分化的に投入される余地がそもそもない。彼女は、この一つの特別な関係に彼女のすべてでコミットしているのである。そしてもし彼女にこれを破棄する理由があるとすれば、それは別の異性との同等の関係によってであるほかない。彼女自身に属する事情などはもとより存在せず、彼女の異性への関係はまさしく全人格的であるため、複数の関係に関与することは不可能なのである。言い換えれば、周は彼女を独占しているのである。このような「恋愛」、一人の異性にすべてを捧げ、まるごと肯定され包み込まれることこそが、女性にとっての幸せとして描かれていたのである[5)]。

ちなみに、周にとっては、りんごとの恋愛のほかに、むしろ彼の生活の主軸として、予備校・受験・T大進学といったより広い世界と仲間たちとの関係があり、りんごの存在は、彼のそうした活動に陰から奉仕する（りんごは彼に毎日弁当をつくって窓から差し入れ、彼はそれを当然のように享受していた）という、部分的な位置付けにある[6]。

女性にとってのこうした恋愛は、りんごの恋愛が結婚生活と地続きであったように、結婚と親和性があり、結婚を基礎づけること、より正確には女性を夫へと強く帰属させることに、少なくとも理念上寄与する。一人の異性との関係からなる生活に全面的にコミットしそのなかで自己を完結させて生きることは、結婚において女性に求められてきた要件だからである。そして、一見矛盾するようだが、他方でそれは、結婚にとって脅威ともなりうる。ひとたび結婚の範疇外の恋愛に関与すれば、それはこの性質ゆえに、結婚と相立たずそれを否定するものになりかねないからである。女性は一人の異性にすべてを捧げる、それが女性にとっての恋愛であり幸福である、まさしくそのようなものとして「恋愛」が描かれていたのである。私たちはここに「強い恋愛」のひとつの典型を見ることができる。

3．現代の恋愛

（1）90年代の作品にみる

しかし以上のような「恋愛」が四半世紀後の現在もリアリティを持っているとは考えにくい。女性にとっての恋愛の様相はそこから異なった方向へと隔たっているように思われる。そのことを考える手がかりとして、次に90年代半ば以降に描かれた恋愛を、この年代の人気作家、安野モヨコと江國香織の作品に見ていこう。

1）私は何がしたいのか～ミリ

安野モヨコの『ジェリー　イン　ザ　メリィ　ゴーラウンド』は、ティーン向け雑誌『Ｃｕｔｉｅ』（1996年5/27号～1998年5/11・25号）に連載された人気マンガである。

主人公四倉ミリは16歳の女の子で、二人暮しだった父親が逮捕され、突然あらわれた双児の姉モモ（実は性別は男）とともに、父親が残した古家に移り住むことになる。ところがそこにはヒカル、ヒデキ、カツヤの三人の男の子が無断で住み着いており、なし崩しに五人の共同生活が始まる。新生活を機にミリは高校をやめ、職探しの途上でスカウトされてモデルになる。後にモモもモデルになり、また三人の男の子も実は同業者であった。作品は「モデルデビュー編」「怒涛の恋愛編」「レンアイ成就編」の三部構成となっているが、その終結は、恋愛の成り行きとは別に、ある日突然このマンガが終わるという二ュースがモモによってもたらされ、十年後に何をしているかについて五人が順番に話すビデオ撮影で終わる。

ミリは男の子をロールモデルとするボーイッシュな女の子で、「ミリオ」という男の子モデルとして仕事をしている。最初は幼馴染みのハジメに夢中になるが、そのために仕事への取り組みが疎かなのを責めるのはヒカルたちである。ハジメへの熱が冷め改めて仕事に取り組もう

とするミリは、しかし、「あたしは何がしたいんだろう、何になりたいんだろう」と常に自問しており、やがて答えがみつかったとして、売れ始めた矢先のモデルをやめようとする。だがそれを「中途半端」と批判するのはヒカルである。のちにミリはヒカルとセックスし、互いに好きだと認め合うようになる。

ミリのヒカルとの関係には、さまざまな他者が入り乱れている。まず三人の同居人、それにハジメは、ミリと「やりたい」という関心からしばしば姿を現わす。ヒカルには元恋人れんげがおり、彼は、彼女がヒカル自身の兄の恋人となっても彼女と会い、さらにれんげが「ミリオ」に迫る状況をつくりもする。その際ミリは、男役のままれんげにどきどきし、自分も彼女のようなタイプの女の子が好きだとあとでヒカルに告げる。

ミリのヒカルとの関係は、好きという感情とセックスによって結ばれているほかに、同居人、男の子としてのロールモデル、同業仲間であり尊敬する先輩、「家族」など、幾重もの関係の束としてある。彼らは、ミリが男の子モデルであるために、仕事上の競合者でさえある。実際、ミリがある仕事を取ったため、ヒカルは仕事がなくて家にいる、という状況も描かれる。

十年後を語るビデオでのミリの発言は、「いやーだって…今だって何だかわかんないのに／10年後どうしてるかなんて／ぜんぜん想像つかないよ」と前置きし、「とりあえず車の免許とるです」「あとねー子供ほしい３人くらい／みんなで歌合戦とかやるの」「なんかみんないて／でっかいフライパンででっかいカステラつくんの／ぐりとぐらみたいの／で食べんの」というものである。「みんな」とは、四人の同居人に、れんげやモデルエージェンシーのスタッフたち、服役中の父親などである。子供がだれとの子供かは言及されない。ヒカルであってもなくても、いずれにせよあまり問題でないようである。ミリにとってヒカルとの恋愛は、りんごにとって周との恋愛がそうであったように、彼女の人生を画するようなものではない。そして彼女は十年後も「みんな」といる。

またここでは、恋愛成就のような事柄は物語を終結させるに足る出来事ではない。そのことは、この作品に限らず近年の少女向けコミックに言えることである[7]。乙女ちっくまんがで、恋愛の成就が話を終結させるに十分な物語性をもっていたことと対照的である。これを、読み手である若い女性における「恋愛」の位置の変化の反映として読むことも無理ではあるまい。

2）等しく遠い位置～果歩・静枝

次に、90年代のもう一人の人気作家江國香織の作品に注目してみよう。

小説『ホリー・ガーデン』（1994）の主人公野島果歩は、30歳目前の一人暮らしの女性で眼鏡店に店員として勤務している。彼女には、小学校時代からの親友で美大を出て高校教師をしている静枝がいる。作品は、果歩を中心に、静枝との長年の関係を軸に書かれている。

果歩は、過去に五年間津久井という男とつきあい別れてさらに五年になるが、物語中の現在その過去を引きずっている。彼女の周囲には、同じ眼鏡店の店員で五歳ほど年下の中野、眼科医の柴原、店の客コウくんなどの男がおり、彼女は後者二人と性的関係を持つが、彼らに特段

の感情を抱いているわけではない。彼らにはそれぞれ「妻」「彼女」がおり、彼女から彼らを誘うことはない。中野とは、自分の都合で気紛れに彼を呼び出す果歩を、彼のほうが一方的に、他の男たちとの関係を知りつつも慕っている、といった関係である。他方、静枝には、画廊経営者で芸術家の恋人芹沢がいる。彼女は彼が妻帯者で遠方に住んでいるためあまり会えないが、会えば別れ際には、一刻も早く一人になってほっとしたいと感じる。恋人のいる幸福を感じるのは、むしろ彼の不在時である。彼女には、定期的に会う大学時代の仲間がおり、そのなかにかつて恋人で今は親しい友人であり妻帯の祥之介がいる。ほかにも同様の友人がいる。

果歩と静枝の生活とその接点が淡々と描かれるこの小説で中心的物語として書かれているのは、果歩の中野への関係の成り行きである。作品は、最終章のひとつ前で、果歩が中野に「きょうは帰らないで。泊っていって」と自分から求める言葉でひとつの着地点を迎える。そして最終場面は、果歩が、津久井との思い出の品であって唯一砕かずにいた秘蔵の紅茶茶碗を出して、中野に紅茶をいれようとするというものである。果歩のなかで遂に中野が津久井にとって代わった、というより、中野という存在を媒介とした過去との静かな和解ともとれるような場面である。そしてこれは、中野が彼女にとって、ちょうど周がりんごにとってそうであったように一人の特別な異性になったことを必ずしも意味しない。中野への言葉と最後の紅茶茶碗のエピソードの間に、果歩がかつて静枝と通っていた小学校を一人訪れ、卒業時につくったモザイクの壁画の天使の前に立つ場面が挿入されている。このとき彼女の回想として、津久井との別れのいきさつも明かされる。津久井は果歩に「妻帯者」と偽っていた、つまり彼女と全面的に関わることを恐れて嘘をついていた、そのことが発覚したのであった。そして彼女は、自分の作った天使と向き合って考える。

> 「なにも変っていない。十八年前にこれをつくったときの私と、いまの私はなにひとつ変っていない。果歩は、不思議なやすらかさで胸を満たしながらそう思った。静枝も中野も、そして津久井も、その果歩からは等しく遠い位置にいる。等しく遠く、それでもたぶん遠すぎない位置」（江國 1994: 312）。

彼女は、彼女を変えることのない、他者たちの等しい遠さに、むしろ静謐な孤独の安らかさを感じている。

(2)「緩やかな恋愛」

以上の二作品に描かれている恋愛は、先に見た「強い恋愛」とはかなり隔たったものであろう。対照させながら見ていきたい。私たちが「強い恋愛」として確認したのは、全人格的コミットメントという関係形式、唯一無二の特別な他者への全体的な、言い換えれば非分化の関係であった。しかもそれは、女性にとって幸せとされていた。そしてまたこのような関係は、結婚と緊密な関係にあった。

まず全人格的コミットメントについて見れば、上の二作品では明らかに、恋愛はこの特質を欠いている。ミリにとって核心的に重要なのは、私は何がしたいのかという問題であって、彼女の生活はその問いを中心に営まれていた。そしてそれはヒカルとの恋愛と直接関わりのないことである。こうした問いは、りんごには存在しなかった。周との恋愛・結婚こそはすべての解答なのだった。また、ミリの生活は、語られていた十年後も含めて、複数の他者たち「みんな」との関係からなる生活である。

『ホリー・ガーデン』では、まさにコミットメントの部分性あるいは希薄さ、全人格的なものでありえなさ、といったことが、ひとつの主題をなしていたと言える。果歩には、「全自我をあたえる」ような特定の異性との恋愛関係は存在しない。彼女は複数の異性と性的な関係を持ち、そのいずれにもさしてコミットしていなかった。過去の津久井との関係は「強い」ものであったように描かれているが、物語中の現在すでに挫折し、彼は、不在、事実上コミット不可能な存在であり、実は過去においても、妻帯者をかたることで全面的なコミットメントを拒む他者であった。物語の最終段階で果歩がそばに置くことを選んだ中野にしても、静枝や津久井とともに「等しく遠い位置」にいる存在である。また、静枝の芹沢との関係も同様に部分的なものである。彼女は「私の知らない土地に生まれて、私の知らない人たちと生きて、私の知らない人たちを愛している芹沢さんが好きなの」（江國 1994: 243）と言う。「秘密」に満ちその全体性が不可視な他者であり互いにいくばくかの部分的な時間を共有するだけの形で関係し合っている、そんな彼を彼女は好きだというのである。むしろ彼女は祥之介とより多くの「秘密」を共有しているようである。そしてまた、果歩と静枝は女同士、どんな異性も踏み込めない濃密な関係を築いている。彼女たちは、たった一人にすべてを与えることなく、複数の人びとと少しずつ関係する。私たちはここに、全人格的コミットメントよりも、関係の部分性という特徴を確認することができる。

これに関連して、恋人の唯一無二性、特別さという点についても、事情はかなり異なってくる。りんごにとって、周は比類なき特別な他者であった。それは二つの意味においてそうであった。第一に、恋人はまさしくただ一人であるということ。第二に、その他者は、彼女にとって自己の存在証明を与えてくれる特別な存在である。りんごの低い自己評価や否定的自己感情は周によって不問となり、彼女の存在はありのままで全肯定された。りんごの人生は彼によって意味を獲得し得ていた。

これに対して、ミリや果歩、静枝には、第一、第二いずれの意味においても、そのような特別な他者は存在しない。彼女たちは、多くの他者と少しずつ関係しており、恋人がいたとしてもそれはあくまで「現在の」「一」恋人であって、彼女たちの生活史上の多くの関係のひとつにすぎない。またむしろ恋人以外に、多くの「秘密」を共有する他者たちがいる。そしてまた、彼女たちは一人の恋人に自己の存在証明を委ねることもない。ミリは自分で自分の答えを探そうとしており、果歩は、周囲の人々が彼女から等しく遠い、そのような「孤独」のなかにむしろ静謐な安心を感じている。そして静枝には美術準備室という「家賃の要らないアトリエ」で

絵を描くという創作がある。

りんごにとっては、周との恋愛は、一人の特別な異性への全人格的コミットメントであった。言い換えれば、りんごは恋愛のうちに完結していた。社会は分化していても、りんごはその一部分にまるごと属し、周に独占されていたのである[8]。ギデンズがロマンティック・ラブに関して指摘したように、彼女の恋愛は「家庭における従属状態」と「外部世界からの相対的隔離」と連係（Giddens 1992: 43）していたと言える。それに対して、ミリや果歩たちは、一人の特定の他者との恋愛によって完結し外部世界から切り離されるということはない。ミリにとっては、ヒカルは同業の競合者であることによって、一人で同時に「外部世界」のエージェントに他ならない存在でさえあった。ミリとヒカル、果歩と中野、静枝と芹沢といったカップルの関係は、さまざまな糸の織り成すネットワークの部分としてある。彼らの関係は、そうしたネットワークから特別に隔離されて二者だけで成り立つことは不可能であるような関係として描かれているのである。彼女たちはあくまで、それぞれで「無数の社会的な糸の交差点」に立ち続けているのである。ここに見るのは、恋愛もまた分化のうちにある、と考えられる事態である。

さらに、恋愛と幸福の関係を見てみよう。りんごにとって周との恋愛は幸福を意味していた。ギデンズによれば、ロマンティック・ラブは、「自分の人生を、いわゆる『申し分のない』ものにしてくれる人に魅了されていく過程」（Giddens 1992: 40）であった。実際、そのように描かれてきた物語は数知れない。しかし、ミリにとってヒカルとの恋愛は確かに幸せなものとして描かれているものの、それで彼女の人生が申し分のないものになるわけでは決してない。私は何をしたいのか、という彼女にとって重要な問いが、ヒカルとの恋愛によって回答を与えられることはない。果歩においては、幸福自体の意味が曖昧化し、不幸との対比を失っている。彼女は中野とのドライブ中「幸福と不幸には境目などきっとないのだ」と思い、晴天を「恒常化されてしまった穏やかな不幸」に似ていると考える。また静枝は「好きな男と幾ばくかの時間を共有する」ことを「幸福」と考え、「不幸がること」を自分に許せない。二人のいずれも恋愛によって全面的に幸福になるということはないようである。あるいは彼女たちが幸福でないのは、「本当の恋愛」をしていないからであろうか。

乙女ちっくまんがでは、女性は恋愛によって幸福になる、＜恋愛成就＝幸福＞という図式が繰り返し提示された。そのような図式は今も一定の影響力を持っているようにも思われる。特別な唯一無二の愛する異性にすべてを捧げること。それによって満たされる幸福。「ほんとうの恋愛」への憧れ(草柳 1996)。しかし、ここで私たちが確認しているのは、こうした図式からの隔たりである。恋愛と幸福は等式で結ばれない。あるいは、私たちが上で見た恋愛は、幸福と等式で結ばれていたような恋愛、すなわち「強い恋愛」とは異なるような、幸福との関係がずれた「恋愛」である。

このような恋愛は、結婚との関係においても、「強い恋愛」とは様相を異にする。りんごが周に対してＴ大医学部の男性を婚約解消の口実としえたのは、「強い恋愛」においては、その

全人格的コミットメントという性格上、複数の関係を並立させることはできないという暗黙の前提があるからである。「強い恋愛」のこの性質が、結婚制度に寄与し、他方で同時に脅威になり得ることは、先に確認した。しかし、静枝、そして妻帯者をかたる津久井と「愛の生活」を送りえた果歩の例において、恋愛と結婚とのそうした緊張関係を見ることは難しい。彼女らの恋愛は、全人格的にコミットせず、「秘密」を抱え尊重し合う、非「独占」的、部分的な関係であることによって、結婚と、あるいは他の類似の関係と、そうしようと思えば並存しえてしまうのである。彼女らのような恋愛――いわゆる「不倫」と呼ばれる――は一見結婚制度への脅威のように見えるかもしれないが、彼女らのように「全体性」を要求せず、言い換えればそれだけの「強さ」を持ち得ない限りにおいては、それは「強い恋愛」ほどには脅威とはなりえないだろう。つまり、恋愛は、結婚との密接な緊張関係から遊離し、結婚制度とは無関連の場所へと漂い出ているとも見ることができるだろう。

4．分化と個人

以上、90年代の二作品を手がかりに「強い恋愛」と対比させることによって現代の恋愛の変容方向を見ようとしてきた。それは、要約すれば、「強い恋愛」が全人格的コミットメントを旨とするものであったの対して、部分的であった。また、前者が唯一無二の比類なき他者を志向し、その相手との出会いを人生を画するものと位置づけたのに対して、そのような他者を必ずしも求めるものではなかった。恋人との関係は「現在の」「一」関係、さまざまな関係のネットワークなのであり、個人は一人の他者に属するかわりに、ネットワーク上の「交差点」であり続ける。そしてまた、「強い恋愛」が幸福の観念と結びつけられていたのに対して、他方は、そこから微妙にずれ、また結婚との関係においても、「強い恋愛」で想定されていたような緊密な関係から隔たり、むしろそこから無関連の場所へと浮遊しつつあるのではないかと考えられるものであった。それは、「強い恋愛」に比べて言えば、より「弱く」「曖昧」で「緩やか」な関係である。このような「恋愛」を、「強い恋愛」に対して「緩やかな恋愛」と呼ぶことにしよう。

ここで私たちは、「強い恋愛」から「緩やかな恋愛」へという変容の方向性をひとつの仮説として挙げることができるように思う。では、このような関係の変容はどのような含意を持つのか。社会分化との関係に引き戻って考えてみたい。

私たちが最初にみた「強い恋愛」は、分化の進んだ社会において、例外的に分化を免れるような特別な関係であるかのように想定されていた。そのような関係が現代いかにありうるのか、という問いを先にはあげたが、然して、私たちが90年代の二作品を通して浮かび上がらせた「緩やかな恋愛」は、恋愛もまた分化のうちにあると言いうる様相を呈するものにほかならなかった。一方に、分化状況において例外的に個人が他者（この場合は当然きわめて特別な他者）と全人格的な関係を築く異例の関係形式としての恋愛（「強い恋愛」）、他方に、分化的関係のひとつとしての恋愛（「緩やかな恋愛」）。もちろん、私たちの個々の恋愛経験は、このど

ちらかということではなく、両者の振幅のどこかに位置するであろう。だが、趨勢としては、後者の方向へ振れている、そう考えられるのではないか。

作田は、恋愛と分化の関係について、次のようにも述べていた。

「封建的諸関係の中では、人間は常に関係の中に解き放し難く巻き込まれた存在として認知され、独立の一個の実体としては表象されにくい。封建的諸関係の解体につれて社会的分化が進行し、独立の個人が登場してくる。そのような状況において初めて、独立の個人の人格相互の関係としての恋愛が『発見』されるのである」（作田 1968(1973): 111）。

彼は、恋愛を、社会の分化によって初めて可能となったとするが、なおかつ、彼の論じる恋愛は、そうして分化状況において独立した個人を一個の「全体」として捕捉する。そのような全人格的な関係であればこそ恋愛は、「外界の圧力」に対抗する「牙城」となりうる、その意味で「反秩序のエネルギー」として、制度への回収が講じられなければならないような関係形式なのであった。恋愛は分化状況に出自し、なおかつ分化状況から個人を奪還する、ということであろう。

だが、「緩やかな恋愛」は、そのような捕捉力を個人と社会に対して行使しない。亀山（1998）は、30歳前後の男女に取材し、最近の彼らが恋愛において「適度に距離を置き、自分の心の奥に踏み込ませないし、相手にも踏み込まない」として、「どうして恋愛関係がこんなに冷めてしまったのだろうか」と問うている（亀山 1998: 4-6）。彼女が取材した、夫と恋人を持つ36歳の主婦は、夫に不満があって恋人を持っているわけではなく、「私が彼らに欲しているものもそれぞれ違うし、与えてくれるものも違う。ひとりの人にすべてを求めようとしたら、かえって関係は崩壊してしまうんじゃないかしら」と言う（亀山 1998: 33）。29歳の独身女性は、特定の恋人を持たずに常に三～四人の男友だちと「曖昧な関係」を保つ。一人の特定の相手とより包括的で排他的な関係を築くよりも、「ニーズに合った人をそのつど選ぶ」（亀山 1998: 68）のだという。

こうした関係を亀山は「低温関係」と名付けているが、それは、ジンメルが分化した人間関係について述べていたことそのままと言ってよい。あるいは、彼女たちは「本当の恋愛」を知らないのだ、それは「本当の恋愛」ではない、という見方もされるかもしれないが、そうした言い方は、「強い恋愛」＝「恋愛」という基準に則った謂いであろう。恋愛は、もはや人びとを分化状況から奪還する例外的な、強い関係形式として想定しえないものとなっていると言ってよさそうである。

一般にこれまで、「強い恋愛」に想定されていたような、例外的に非分化であるような全人格的な関係、「外部世界からの相対的隔離」によって個人を包み守る「牙城」的な関係は、ある種価値づけられてきたと思われる。社会学も、私たちの関係をゲマインシャフトとゲゼルシャフト、私的なものと公的なもの等々に二分し、一方を私たちにとって基本的で欠くことので

きない親密性の領域としてきた。それは、他方の領域に対して私たちを保護するもの、言い換えれば相対的に隔離するものと考えられてもきた。恋愛やその上に実現するとされてきた夫婦・家族関係はその代表である。それらは、社会全体の分化状況におけるサンクチュアリのように観念されてきたと言えよう。りんごにとって「恋愛」は、まさしくそのようなものとして描かれた。彼女は、周にまるごと肯定され包み込まれ守られていたのであり、それが彼女の幸福だった。だが、そのような関係が、もはや一般的に女性の求めるべき幸福としてのリアリティを持たなくなっていることは、彼女の物語から四半世紀たった今では明らかになっているところであろう。

「強い恋愛」の「関係の強さ」は、個人を包む。それに対して「緩やかな恋愛」においては、個人はその関係にまるごと包まれ守られる、というわけにはいかず、多かれ少なかれより広いネットワークの交差点であり続けることになる。有り体に言えば、女性は、一人の異性に全面的に帰属し守られる、という生き方から、多様な社会関係のネットワークのただ中で生きる、という方向にあるということである。そのとき、単純な道理として彼女には、「強い恋愛」においては問題なくまた必要でもなかった、「個人」の「強さ」[9]、および多様な関係のネットワークをより強く必要とするだろう。個人の「強さ」の意味はさまざまであろうが、少なくとも、ひとつの「強い関係」に埋没しえず包まれえない個としての「弱さ」に耐える「強さ」ということになるであろうし、それを支えるのは、純粋に個人としての資質であるよりも、諸関係のネットワークの有り様なのではないだろうか[10]。りんごは周という比類なき一人の他者との「強い関係」に彼女のすべてを委ね、そこに幸福を見い出していた。ミリや果歩にその幸福はなかった。しかし、ミリや果歩にあって、りんごに決定的に欠けていたのは、個人としての自分を自分自身に委ねつつ、多様な他者たちへと開かれた関わりあいであった。

最後に恋愛の結婚との関係についても考えておきたい。結婚という一方の「秩序」に対して、「強い恋愛」は「反秩序」性を想定されながらも裏腹の親和性を持つものであった。その意味で、それは秩序に対して、正か反かという緊張関係にあった。かつて「自由恋愛」と呼ばれたものは、旧来の秩序からの「自由」をことさらに標榜するものであった。これに対して、「緩やかな恋愛」は、結婚の秩序とのこうした緊密な関係からの離脱というベクトルを持っていると考えられた。「緩やかな恋愛」は、「強い恋愛」のように、結婚への直接的な誘因や夫婦関係の基礎づけ、井上が６０年代に指摘しえたような「婚姻率確保の機能」をあまり果たし得ないものと思われるが、そのかわり結婚に即座に対立しそれを否定したりするような反社会的エネルギーにもつながりにくいだろう[11]。結婚が、法が定めるように、一人の異性との比類なき排他的持続的な関係であるとすれば、「緩やかな恋愛」とそのような関係とのあいだには、端的に「強い恋愛」にはなかった距離が横たわっており、このような恋愛の自由は、結婚の秩序に対して「強い恋愛」が保持していたような積極的な作用を消失しつつあるとと言えるだろう。言い換えるなら、「強い恋愛」がリアリティを持っていた時代には、一方に結婚という「秩序」、他方に恋愛の「自由」という二項がリアリティをもって対置されえたのに対して、「緩や

かな恋愛」においてはそのような対置そのものがリアリティを失いつつあるということである。

「強い恋愛」において指摘された恋愛の「婚姻率確保の機能」がもはや弱化していることは、昨今のシングル化現象からも明らかになっているように思われる。「強い恋愛」による「恋愛結婚イデオロギー」と結びついた、性愛を基礎にした比類なき組み合わせとしての夫婦関係、これのみを特権的な社会的単位として扱う制度、女性を結婚に囲い込み夫に帰属する存在として扱う制度もまた、今後益々現実との乖離を深めていくものと思われる。

【注】

1）「恋愛」とカテゴリー化されてきた関係の変容を近年考察したものに、ギデンズの『親密性の変容』（Giddens 1992）がある。彼は、ヨーロッパで18世紀後半以降重視されてきたロマンティック・ラブという観念が現代では後退しつつあり、「ひとつに融け合う愛情」「純粋な関係性」と呼びうる新しい観念が志向されるようになってきていると言う。現代日本は、言うまでもなくヨーロッパとは異なる文化的環境にあるが、明治期にロマンティック・ラブの観念を輸入し、その価値を受け入れ賞揚してきた（柳父 1982）。だが、現代では「恋愛」とカテゴリー化される関係のあり方、あるいは「恋愛」において人びとが結びつく仕方は、以来、時代の流れのなかでやはり変容してきたと考えられる。ギデンズの議論は、文化の違いを超えて、私たちの社会で進行しつつある変化を理解するひとつの助けになるだろう。

2）作品の内容分析は、質的な分析である以上、選択する作品によって導き出される分析結果は異なってくる。従って、ここで取り上げる作品がどのような資格で「標本」として選択されたのかについて述べておく必要があるであろう。もちろん、各年代のすべての女性向け作品を母集団とする無作為抽出ではない。そうした作品群自体多種多様であり、各年代を代表するような作品を挙げるということも困難である。かくして、ここで取り上げる作品は統計的な意味で代表性を持つものではない。ここでは、「恋愛」の変化の方向を際立たせるため、「恋愛」の描かれ方としてむしろ極端なものをあえて選んでいるとも言える。しかし、それぞれの作品の同時代における位置について言えば、少なくともそれらはいずれも、同時代において人気と注目を集めている作家によるものである。そして、ここでは、人気や注目は、それらの作家の作品に同時代の人びとのリアリティと響き合うものがあることを示している、という前提に立っている。

3）もっと一般的な言い方をすれば、互いにプライバシーを認め尊重し合うということ、他者について自分に開示される情報以外について詮索しないということである。これは分化状況を生きている私たちの規範といってよいだろう。

4）現在『田渕由美子作品集1』に収録され、彼女の代表的な作品として位置づけられている。

5）ここにはギデンズの指摘したロマンティック・ラブの特徴、すなわち、関係を「永遠」で「唯一無二」のもの、崇高な愛情による排他的な結びつきとして観念することなどを見ることができる。ちなみに、これを森永は「オンリーユー・フォーエバー原則」と呼んだ（森永 1997）。

6）こうした性別非対称性は、ギデンズもロマンティック・ラブの特徴として指摘した点である。すなわちそれは、事実上異性愛をモデルとし、しかも男女で釣り合いを欠き、女性にとっては、「家庭における従属状態」および「外部世界からの相対的な隔離」と連係していた（Giddens 1992: 43）のであった。こうしたこと自体ひとつの興味深い問題だが、ここでは追究しない。

7）例えば、現在もっとも読まれている少女マンガ月刊誌『別冊マーガレット』に連載されている人気コミック「恋愛カタログ」（永田正実）、「まっすぐにいこう。」（きら）など多くのコミックの物語の中心は、主人公の恋愛成就よりもその後の、彼女を取り巻く同性・異性の友人関係、恋愛に割り込んでくるライバルたちとの関係をふくめたさまざまな成りゆきである。

8）恋人に毎日弁当を作り、その帰りを人気のない公園で一人待つりんごの姿が、恋愛結婚した専業主婦のあまりにも分かりやすいメタファーであることは言うまでもない。

9）桜井（1998）を参照。

10）現代の個人は、「強い恋愛」がリアリティを持っていた時代に想定されていた以上に、むしろ「弱さ」や「曖昧さ」によって特徴づけられるような自己ではないかと考える。草柳（1998）を参照。

11）「緩やかな恋愛」と結婚は互いに排他的ですらない。例えば「家庭外恋愛」（朝日新聞 1998.8.29）という言葉が出てきているのもその一例であろう。98年夏に朝日新聞はこれを連載で特集した。結婚の生活保障の場としての役割が薄れ、情緒的つながりが重視されるようになってきたことによって、それが配偶者によって満たされない場合には、他の人に求める、ということが起こる、として、家に居ながらにして、インターネットなどで恋人を求める人などの例が取材されている。また、同社の世論調査によれば、配偶者以外との恋愛を許容する人も少なくないという（朝日新聞 1998.8.30）。

【文献】

安野モヨコ　1997-8　『ジェリー イン ザ メリィゴーラウンド』①～③, 宝島社.

江國香織　1994　『ホリー・ガーデン』新潮社（新潮文庫版 1998）.

Giddens, A.　1992　*The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Stanford University Press, Stanford, CA.　『親密性の変容－近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム』松尾精文・松川昭子訳。而立書房（1995）

井上俊　1966(1973)　「『恋愛結婚』の誕生――知識社会学的考察」『死にがいの喪失』筑摩書房.

井上俊　1969(1973)　「愛と性の秩序」『死にがいの喪失』筑摩書房.

亀山早苗　1998　『低温関係』WAVE出版.

草柳千早　1996　「恋愛二元論というレトリック」磯部卓三・片桐雅隆編『フィクションとしての社会』, pp. 113-135, 世界思想社.

――――　1998　「『問題経験』の語られ方」『社会学年誌』39: 5-36, 早稲田社会学会.

森永卓郎　1997　『＜非婚＞のすすめ』講談社.

大塚英志　1991　『たそがれ時に見つけたもの』太田出版.

桜井洋　1998　「現代社会と自己」『社会学年誌』39: 1-4, 早稲田社会学会.

作田啓一　1968(1973)　「恋愛観と家族観――北村透谷と巌本善治」『深層社会の点描』筑摩書房.

Simmel, G. 1908　居安正訳『社会学』白水社（1994）.
――――― 1890　居安正訳『社会分化論　宗教社会学』青木書店（1998）.
田渕由美子　1975(1996)　「風色通りのまがりかど」『フランス窓便り』集英社.
柳父章　1982　『翻訳語成立事情』岩波書店.

（くさやなぎ　ちはや　大妻女子大学社会情報学部）